

Title	消費の順序並に限度に関する原則及び其の行はるゝ結果に就て（下）
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.10 (1915. 10) ,p.1186(110)- 1197(121)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九一五年

五、〇四六

二、一二八

一、七五七

四一五

三〇八

一月 七日

四、七七九

二、〇六五

一、六三〇

四〇四二

三二九

一 一五

四、五九二

二、〇〇八

一、六四二

四〇六四

三四二

一 二三

四、四八四

一、九六八

一、六二五

四〇七八

三五五

一 三〇

四、六五九

二、〇五六

一、四五三

四〇六四

三五四

二 六

四、六七二

二、〇七四

一、四五一

四〇七〇

三五九

二 一五

四、六三七

二、〇三八

一、四九八

四〇八一

三六三

二 二三

四、六三五

二、〇二一

一、七二四

四〇八六

三五四

二 二七

四、八六三

二、二四〇

一、五八一

四〇六七

三五二

三 六

四、九〇五

二、一六六

一、七一二

四〇六八

三四七

三 一五

四、九三七

二、一六一

一、八九六

四〇六九

三三九

消費の順序並に限度に關する原則及び其の行はるゝ結果に就て (下)

増井幸雄

以上三節を重ねて消費の順序並に限度に關する

る原則を述べた。以下各種の場合を設け例を擧げて此の原則の適用せらるゝ有様を示し且つ其の結果として表はるゝ重要な現象を指摘して見やう。即ち場合を分つて次の三とする、同じ又は同じ強さの欲望をば種々の財の種々なる分量を以て満足せしむる場合、同種同量の財を以て種々なる欲望を満足せしむる場合、及び種々

なる財の種々なる分量を以て種々なる欲望を満足せしむる場合即ち是れ。先づ前者から始める。

四 同一の欲望又は同じ強さの種々の欲望を満足せしむる場合

(A) 同一の欲望を満足せしむるに足るべき種々の財あり。而も之が消費に當つて何等の犠牲をも要せざる場合、例へば渴を覺ねたるがために水にてもサイダーにても或はビールにても其の何たるを問はず苟も渴を醫するに足るものならば採つて以て飲用せむことを欲し而も之に對して何等の犠牲をも拂ふことを要せざるが如き場合に於ては、是等のサイダー・ビール等の消費に關しては何等一定の順序を見出すことは出来ない、唯手當り次第に飲用するといふに過ぎない、何となれば此の場合に於ては何れの財にも撰擇の標準たり順序を定むるの標準たるべきを差益なるものが生じて來ないからである。

本もなき場合に於て已むを得ず雑誌を買つて讀むのである。蓋し此の場合先づ水を撰び新聞紙を撰ぶのが差益を最大ならしむる所以であるからである。若しそれ犠牲は大なりとも講談本よりも先づ雑誌を撰ぶと云ふ場合ありとせばそれは雑誌を讀みたいといふ欲望が講談本を讀みたいといふ欲望よりも強い場合に外ならざるのであつて、是れ又此の場合に取扱ふ範圍内に入つて來ない。

次に欲望の種類を異にして居るが而も其の強さが同じであるといふ場合、例へば避暑旅行も一回したい、夏服も一着作りたい、書物も一部買いたいといふやうに種々の欲望あり、而も此の欲望満足によりて得る快樂の程度が皆等しいといふ場合に於ても消費の順序は同一の欲望の場合と全然同じである。

猶是等は唯一回だけの消費に關する場合であるから消費の限度並に其の結果如何に就ては何

等云ふべきことはない。

五 同種同量の財を以て種々の欲望を満足せしむる場合

財の中には例へば水が飲料用・炊事用・洗濯用・泉水用等に供せられ、米が食用・菓子用・家畜飼料・糊用等に供せられ、貨幣が百般の財の購買用に供せらるゝといふが如く、同じく消費の方面のみに於て多數の用途を持つて居るものがある。斯る財は如何なる順序によつて如何なる限度まで消費せられ又其の結果は如何なるものとなつて現はれるか。

(A) 犠牲を要せざる場合。人が既に所有して居る所の財を消費するに當つては、それが過去に於て犠牲を拂つて得たるものたるを否とを問はず、之を或る用途に供する限りは他の用途に供することを不可能ならしむるが故に見方によつては之を以て欲望満足なる快樂に對するの犠牲と考へられないことはない。然し人は消費の

目的を以て既に所有せる財例へば米とか半紙とかを消費するに當つては、商人又は生産者が販賣の目的を以て所有せるものを自ら消費する場合とは異なつて、之を以て何等の犠牲とも考へない。故に斯の如き場合に於ては消費の順序は前に述べた「自然的順序」によるので即ち欲望の強弱の順序に従つて消費が行はれるのである。

然るに欲望の強弱の差は、其の時々の事情によつて或る種の欲望例へば食事の欲望をば他の種の例へば讀書の欲望よりも特に緊切に感ずるといふが如く、欲望の種類といふ横の關係から生ずるが、又同じく食事の欲望の中でも最初の皿よりも二度目の皿、二度目の皿よりも三度目の皿と漸次食ひ進むに従つて之に對する欲望の強さを減することいふが如く、欲望の位次といふ縦の關係からも生ずる。そこで今種類並に位次の兩方面から生ずる同種同量の財に對する欲望の強弱を左表の如くであると假定し(正數を

以て欲望の強さ、負數を以て欲望の消極的の強さ即ち財を嫌忌する情の程度を示す)且つ同種の財をば幾多の等しき一定分量宛に分けたと考へる。

欲望の 種類		位次			
		A	B	C	D
I	I	5	4	3	2
	II	4	3	2	1
	III	3	2	1	0
	IV	2	1	0	-1
	V	1	0	-1	-2
	VI	0	-1	-2	
	VII	-1	-2		
	VIII	-2			

然るときは消費の順序は如何といふに、第一の定量は先づA種第一次の欲望を満足せしむる爲めに消費せられ、第二の定量はA種第二次又はB種第一次の欲望を満足せしむるの用に供せられ(第三の定量も第二の定量と同様)第四の定量はA種第三次、B種第二次又はC種第一次

の欲望満足の用に供せられる(第五、第六の定量も亦第四の定量に同じ)。以下の定量も亦同様に右の表に表はされたる數の大小の順に従つてそれ〴〵欲望満足の爲めに消費せらる。然しながら各種の消費行爲は無限に繼續されるものではない、財の分量が充分に有り餘る場合に於ても、A種の欲望は第五次まで、B種は第四次まで、C種は第三次まで、而してD種は第二次までそれ〴〵満足せしめらるゝに止まつてそれ以上には及ばない。故に此の場合に於ては各種の欲望に就て最後に満足せしめられたるものゝ強さ、即ち限界的の享樂、換言すれば財の各種の用途に於ける限界的効用は皆等しくなる點に於て一致して居る。茲に於てか吾人は限界効用均等の事實を發見するのである。然し財の分量が極めて不充分にして各種の欲望を右に述べた點まで満足せしむるに足りない時は如何、消費行爲は無論右の場合よりも以前に已むを得ず斷絶

される、而も消費が前に述べた順序に従つて行はるゝ限りは各種欲望の限界的享樂又は財の各用途に於ける限界的効用は均等の實を示すか或は出來得る限り均等に近くなることに至つては毫も前の場合と異なる所はない、唯その均等になるの點が前の場合よりも高いといふの相違あるのみ。福田博士が消費に就て論じて居られるのは此の(A)場合である。

(B) 同種同量の犠牲を要する場合。同じく米でも又同じく半紙でも、之を販賣の目的を以て所有する者は之が消費を以て或る犠牲を供する事と考へるに反し、消費の目的を以て之を所有する消費者は之を消費することを以て何等の犠牲を拂ふものとは考へない。然るに茲に殆んど凡ての人が其の消費を以て一の犠牲と考へる所のものがある。それは貨幣である。貨幣は同一財にして用途最も廣きものに屬するが、之を無限に有する者にあらざる限りは貨幣の支拂を

以て必ず犠牲と考へる。故に一定の犠牲を拂つて種々の欲望を満足せしむる場合の代表的なるものとして貨幣消費の場合を擧げることが出来る。然らば其の消費の順序限度並に結果は如何。

貨幣の消費は他の財の購買として現はれるのであるが、其の行はるゝ順序は右に述べたる(A)の場合と同じく欲望の強弱、効用の大小の順に従ふ。但し茲に云ふ欲望の強弱や効用の大小は貨幣に對する欲望の強弱や貨幣の効用の大小のことではなくして、一定の貨幣を以て買ひ得る財に對する欲望の強弱、一定の貨幣を以て買ひ得る財の効用の大小を意味するのである。即ち例へば一圓宛の貨幣の消費せらるゝ順序は、同じ一圓を以て買ひ得る多數の財の効用を比較して其の中最も大なる効用を有するものゝ購買の爲めに眞先に消費せられ、其の種の財の購買繼續の結果限界効用が第二の種類の財の限

界効用より將に少くならむとするに及んで新に第二の種類の財の購買の用にも供せられ、以下第三第四の種類の財にも及んで行くのである。然し消費の限度に就て見れば此の場合に於ては前の(A)の場合と少しく趣を異にして居る。即ち前の場合に於ては各種の消費は財が充分なる場合には限界効用が零とならむとするの點を限度とするに反し、此の場合に於ては(貨幣の限界効用が零となるが如き稀有の場合を除くの外は)、貨幣が假令充分あつても、財の限界効用と貨幣の限界効用とが等しくなるの點を限度とし、各種の購買は欲望が飽滿點に達する以前に於てそれ〴〵中止される。此の點を購買限界點と名づく。而して各種の財の限界効用は此の點に於て均等となる。故に限界効用の均等といふことが前の(A)の場合に於ては單に各種の用途に於ける限界効用の間に表はるゝのみなるに反し、此場合に於ては各種の財の限界効用の間のみならず

其の上に猶ほそれ等と貨幣の限界效用との間にも表はれるのである。けれども若し貨幣を有すること極めて少き場合に於ては購買限界點に達する以前に於て自然に停止せざるを得ない、而も其の結果は限界效用の均等又は之に近きものとなつて現はれることは(A)の場合に述べた所と同様である。毎月或は毎年收受する収入の一部を割いて貯蓄するが如き場合に於ては限界效用は購買限界點に於て均等となり、何等貯蓄するの餘裕なき場合には限界效用は此の點以上の或る點に於て均等を示すことになるのである。河上博士が消費に就て論じて居られるのは此の(B)の場合である。

以上述べたる所によつて見れば、同種同量の財を以て種々の欲望を満足せしむる場合に於ては、犠牲を拂ふと拂はざるとの如何に拘はらず又財の分量の充分なると否とを問はず、消費行為の中止される點——欲望飽滿點が、購買限界

點か、若くは是等に達する以前の或る一點——に於て各種の用途に於ける限界效用は必ず均等になるか又は均等に近い状態を呈する。然るに犠牲を要せざる場合には效用は同時に差益であり、又犠牲を要するも其の分量均しきときは差益の大小は效用の大小と一致はせぬが比例するから、限界效用が均等になるといふことは即ち限界差益が均等になるといふことに外ならない。故に吾人は一般的に消費の順序並に限度に關する原則が行はれるときは其の結果として限界差益均等の事實を示すことになること云ひ得るのである。

六 種々の財の種々の分量を以て種々の欲望を満足せしむる場合

以上、四・五の兩節に於て吾人は「同一又は同じ強さの欲望」とか「同種同量の財」とか云ふ如く、特別の條件の附いた場合に就て述べて來たが、今や何等斯の如き條件の附かない一般

の場合に就て述べべき時機に到達した。種々の欲望あり、以て之を満足せしむべき財の種類及び分量亦それ〴〵異なる場合に於ては消費は如何なる順序により如何なる限度まで行はるべきか、又其の結果は如何。

(A) 犠牲を要せざる場合。何等犠牲を要せざる場合に於ては人は先づ如何なる財を選び又如何なる限度まで消費するかといふに、之は前節(A)の場合に於けると同じく效用の大小の順・欲望の強弱の順に従つて消費し財が充分あれば欲望が飽滿せむとするまで之を繼續するのである。バツテンは此の場合を説明するに無料の宴會に招待されたる場合を以てし、田島博士も亦其の著書に於て之を引用して居られる。その大意に曰く『人が無料の宴會に招待されたる場合に於て卓上には珍味佳肴所狭きまでに並べられて客の取るに任せてあるとせば、疑もなく自己にとつて最も大なる享樂を與ふる所の料理

種の料理の限界効用は常に歩調を揃へて行かうとする傾向あり、食事の終つた後に於ては自己の味つた各種の料理の限界効用は全く均等になるか又は極めて均等に近いものとなる。而して料理が充分なる場合に於ては此の均等の事實は各種の料理に就て欲望が飽滿せむとするの點に於て表はれるのである。

(B) 犠牲を要する場合。何等の犠牲をも拂はずして消費し得ることは自己が既に財を消費の目的を以て所有し居る場合とか他人に招待された場合とか又は其の他の所謂自由財の場合の如き極めて特殊僅少な場合に限られてゐるのであつて、今日の如き交易と分業とに基づける經濟組織の下に於ては殆んど凡ての財は犠牲を拂つて他から取得しなくてはならぬ有様にあるのだから、次に述べやうとする此の場合は一般的な場合の中に於て最も一般的なる場合に相當する。予は今其の中最も代表的なるものとして貨

幣を以て財を購買消費する場合に就て述べて見やう。

此の場合に就て再びバツテンの擧げた例を用して見ると、彼は無料宴會に招待された場合の説明の後を受けて『之に反して代價支拂を要する普通の料理店に行つた場合には食ふべき料理の撰擇が招待された場合とは頗る違ふ、非常に好んで居る料理が少しく好んで居る料理に比して二三倍の高價なることを知るべきは前者を棄て、先づ後者を撰ぶ』と云つて居る。今一步を進めて此の場合の心理を説明して見やう。

假りにA B C三種の財あり、其効用がAは40より、Bは35より、而してCは30より始まり、それ〴〵5宛の差を以て遞減するものとし、犠牲たる代價は各一個につきAは30、Bは20、Cは10なりとすること左表の如くなりとする。

種類	位次								代價
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	
	效用								

役を 替し 人が 差益 の總 額の 大 なら むこ とを	C B A			
	20	15	10	I
	15	10	5	II
	10	5	0	III
	5	0		IV
	0			V
				VI
				VII
				VIII

然るときは消費は前に述べたる原則によつて差益の大小の順序に従うて行はれるのであるが、其の標準となるべき差益の大小の順序は此の場合効用の大小の順序を逆行し、効用の最も大なるAに於て差益最も小に、効用最も少きCに於て差益最も大であること左の如くである。Cに於て差益最も大なるは單に代價が最も低廉なるが爲めではなく、効用の割合に代價が低廉なるが爲めなることは勿論である、A及びCに於て差益の小なること亦之に同じ」

故に若し人が差益の總額の大ならむことを欲するものなりとすれば右の表に示した所によつて先づ第一にC1を一個買ひ次にC2及びB1の兩者を何れかの順序によつて買ひ終りたる後はC3 B2及びA1の三者をば何れかの順序によつて買ふ(以下同じ)ことになる。然しながら之は貨幣を多額に有して其の限界効用の極めて少い人とか又は代價の額が極めて少いとかいふ場合には起り得るかも知れぬが、多くの場合殊に貨幣を有すること少き人とか又は代價の額が大なる場合とかに於ては差益の總額の大ならむことより其の割合の大ならむこと即ち代價一單位當

りの差益の大ならむことを望むものであるからして、茲に差益の割合の大小を見なければならぬ。即ち次の如くである

	I	II	III	IV	V
A	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{6}$	0		
B	$\frac{3}{4}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{4}$	0	
C	2	$\frac{1}{2}$	1	$\frac{1}{2}$	0

故に此の場合にはC1、C2、C3、B1、C4、B2、A1、B3、A2といふ順序で效用の最も少いCから始まつて效用の最も多いAに向つて消費が行はれる。パターンが先きに引用した例に於て「人は非常に好んで居るものでも代價が二三倍の高價なる時は余り好まぬものでも代價の安いものを先づ撰ぶ」と云つたのは畢竟此の事を云つたのである。而して消費の限度は限界差益が零とならむとするの點に於て劃さるゝから、貨幣を充分に所有して居る場合に於ても消費はC種財

は四回、B種は三回、A種は二回を以て打切とせられる、蓋し是れ以上の消費も或る程度の享樂は與へるが、その享樂は以て代價を償ふに足らないからである。かくて各種の財は此の際差益が零とならむとするの點に於て限界效用の代りに限界差益の均等なる事實を示すのである。

要 論

要するに、人は常に享樂と犠牲、效用と費用とを比較して其の間の開き即ち差益を大ならしめむことを力むるものなるが故に、消費行為を爲すに當つても其の時々に於て最大の差益を與ふるが如きものを撰んで行く。其の結果として消費は之より生ずる差益の大小の順序に従つて行はれることになる。尤も此の順序は、消費に犠牲を要せざる場合及び之を要するも其の分量が等しき場合に於ては欲望の強弱、效用の大小の順序と並行し、種々なる犠牲を拂つて同じ程度の欲望満足を得る場合には犠牲の大小の順序

と逆行することになるが、かくの如きは是等特殊の場合に於て差益の大小の順序に従ふ所以に外ならざるが故に、一般的に差益の大小の順序に従ふものと云はなければならぬ。次に斯る順序に従つて行はるゝ消費は無限に繼續するものではなくして、一定の時に於ては一定の限度がある、差益の大なるものより順次其の小なるものに及び遂に差益の毫も得られざるに至れば假令財の分量は充分に存するも消費は自ら其の點に於て中止せられてそれ以上には繼續されない。而して此の差益の皆無となる點は、消費に犠牲を要せざる場合には限界效用の零となるの點である、犠牲を要する場合には限界效用と限界費用とが等しくなるの點であるが、何れの場合に於ても各種の消費行為に於ける限界的差益は悉く皆無ならむとするの點に於て均等を示すことになる。又財の分量が不十分なる場合に於ても消費が右の順序に従つて行はるゝ限りは限界的差益は均等になるか又は均等に近くなる。

唯其の均等を示すの點が前者と異なつて少しく高いといふの相違あるのみ。是等の事は一般の場合でも又特殊の場合でも常に起る所であつて敢て相違する所はない。故に「消費は常に限界的差益の大小の順序に従つて行はれ、差益の存する限り(財の分量の不充分なる場合には財の存する限り)繼續し、其の結果は又常に限界的差益の均等を來すか又は來すに幾幾なる」と云ふことが出來、又之を結果から見ても「消費は限界的差益の均等を來すやうな具合に行はれる」と云ふことも出来るのである。(完)(四、五、一)

引 用 書 目

Robert Liefmann: Die Entstehung des Preises aus subjektiven Wertschätzungen.
(Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 34. 1412.) (國民經濟雜誌大正二年六月號以下)
Simon N. Patten: The Consumption of Wealth. 1901. P. 17-23.

福田博士「經濟學講義」第二篇第二章
河上博士「經濟原論」第二章第四、
田島博士「經濟原論」上 第二章第二節、